18世紀英国ユーモリストたち

――サッカレーとユーモリストについて――

鈴 木 幸 子

サッカレーの講演『18世紀英国ユーモリストたち』ほど反サッカレー派の批評家たちの攻撃目標になっているものはない[1]。それは1851年5月の第一回ロンドン講演直後に始まり、20世紀に入ってもStern批評で必ず言及されるもので、ある意味ではこれは1990年代まで続いているものである。

そこで今回はこの講演の主題の一部となっているユーモリストの言葉をキーワードとして、これまでの批評を参考にしつつ、この講演の文学的技法及びサッカレーの意図を探ってみたい。

1

サッカレーがこの講演の原稿を書く以前にユーモリストについて語ったものはあまり見受けられない。またこの講演がユーモリストの定義を役立たせようとして書かれたものでもない[2]。本来サッカレーは形式的な論理や哲学を前面に出すことはあまりない作家であると、これまで批評家たちから指摘されているところである。そこでこの講演を理解する手がかりとして講演の原稿が書かれた時期及び講演発表後の批評などについて見ることにしよう。

ユーモリストについての講演がどのような経過で決められたかについての確実な資料はGordon N. Rayの伝記[3]や書簡集[4]に見あたらない。ただし伝記、書簡集によれば次の事は確かであると思う。

1850年9月サッカレーはアメリカで講演を思いついた。それは*Pendennis*（1848－50）が12月に23、24号の合冊で最終号が出版される直前であった。サッカレーが1851年3月母に宛てた手紙には彼は18世紀の資料に埋もれるような毎日です、と伝えていた。この頃彼は*Henry Esmond*（1852）の準備と講演の原稿を書くことを並行して行っていたと思われる。この時期の一致については、講演は長編作の副産物で経済的な意図によるものと講演を軽くみる傾向もでた。しかし、1851年5月22日にロンドンでWilli's Roomという、かなり豪華な部屋に当時の知識人及び名士を一堂に集めての有料講演会ともなれば、サッカレーのこれに対する準備は片手間とは言えないものがあったと推察される。ちなみに以下に主な出席者名をしるす。Miss Brontë, Carlyle, Forster, Hallam, Heyward, Lewes, Miss Maritineau...bishops, bigwigs and parliament men, etc.

次に発表当時及びそれ以後の主な批評を見てみよう。批評の傾向は次の3つに大別される。

1は高く評価する。2は非難と酷評であり、3は1と2の中間である。

1のグループは

The Atlas, Daily News, London Ilustrated News, Leader, Literary Gazette, Morning Chronicle, Morning Herald, Times

などに発表されているものである。この1グループの特徴は

"the past is truly recreated here" (Flamm 283)[5], "thougtful and picturesque" (Flamm 160), "a picture of the wit and manners of the eighteenth century" (Flamm 171), "Our Graphic Humourists" (Flamm 676)

などで示されているように、過去を再現していると言う絵画的な表現を指摘している。また Saintsbury の "creative" と言う評がある。しかしこの点を強く受け止めると Charles Whibley の評のように、

"...he refused to recognise the tyranny of facts." (*Wisdom* 143)

となりこれは2グループの評に属する。

例えば

"...the two main after crop", "*The English Humourists* is by far the most important 'place' for this criticism in the literary department"[6]

とその評価は上下する。この3グループには次の評も入る。

"Heaven forbid this should suggest that when he came to fact...more especially when he dealt with his beloved eighteenth century...he was careless. On the contrary, he knew it familiarly as a hand knows its gloves" (Saintsbury 202)

ここでは "aftercrop" や "careless" という否定的な言葉もでる一方、"the most important 'place' for the criticism" 又は "he knew it familiarly as a hand knows its gloves" と言う肯定的な評にもなる。

第2グループの酷評の筆頭は Forster の *The Examiner* における "the most guccessful literary imposture" である。これは Charles Whibly の "he refused to recognize the tyranny of facts" という評とともに講演が史実をまったく無視している、と決めつけているのも同然である。しかしこれらの評に対して言えることは、18世紀文人たちを現実的に伝えるには、想像力を働かせることも必要ではないであろうか。その原動力となるのは、この講演で用いられているユーモリスト、ユーモアなどではなかろうか。

2

ユーモリスト (humourists) の語源ユーモア (humour) は古くはラテン語 *humor*「湿気」に始まり、中世、ルネッサンスなど経て現代に至るまでその歴史は長い。

OEDやブリタニカを瞥見しても年月により数多の変遷を経て、かつ時代相の反映を示しつつ今日に至り、定義するには困難な言葉である。しかし中世の4体液、ルネッサンスのヒューマニズム、シェイクスピアやベン・ジョンソンが用いる「気質」、現代のヒューマニストなど、多様に用いられても人間そのものに密着した言葉であることは確かである。[7] サッカレーの時代、19世紀では、こっけい、奇妙な、の意味合いも入り、愛情、優しさなども加わっている。特に英国人はユーモア、ユーモリストの言葉が好きで彼らの特質を示すものであると、エッセイなどで述べられているほどである。そこには心のゆとり、対象から少し離れて、ものを鑑賞する態度も含まれている。このようにきわめて曖昧で、しかも一般に用いられる言葉であるが、そこに含まれているヒューマニズムには人間の発見、解放などの意味が生きている言葉である。

そこでサッカレーはユーモリストをどのような意味で誰をどのように語っているかを中心に考えてみよう。以下はその対象として取り上げられた18世紀文人である。番号は発表順をしめす。

1. Swift　2. Congreve and Addison　3. Steel　4. Prior, Gay and Pope
5. Hogarth, Smollett and Fielding　6. Sterne and Goldsmith

サッカレーは第一回のSwift講演の冒頭でユーモリストを語るその方法と範囲を示している。

In treating of the English humourists of the past age, it is of the men and their lives, rather than of their books, that I ask permission to speak to you; and in doing so, you are aware that I cannot hope to entertain you with a merely humorous or facetious story. (469)[8]

即ち、ここでは彼らの作品より人生について語り、彼らをユーモリストと呼んでも、こっけい話でも奇を求めるものでもない。従って、聴衆を楽しませるものではないと断わっている。またユーモリストの役目は人生の日常の行動や情熱を批評し、人々に愛と同情をもたらす説教師のものである。

To the best of his means and ability he comments on all the ordinary actions and passions of life almost. He takes upon himself to be the week-day preacher, so to speak. (470)

そこでSwiftを語る時にはどのような説教師をサッカレーは期待するのか。それは次のように続けられる。

The humorous writer professes to awaken and direct your love, your pity, your kindness—your scorn for untruth, pretension, imposture—your tenderness for the weak, the poor, the oppressed, the unhappy. (469 - 470)

ところがサッカレーのとった手法はSwiftの人生を語ることであった。これはサッカレーの語りを誤解する立場に彼を置いたのではなかろうか。しかし彼はSwiftの簡単な伝記的事実の

みを簡潔に語り、誤解を避ける努力をしている。さらにサッカレーはできるだけ公正な立場をとるように、主要な伝記作家の説を彼独自の劇的表現で紹介している。

You know, of course, that Swift has had many biographers; his life has been told by the kindest and most good-natured of men, Scott, who admires but can't bring himself to love him; and by stout old Johnson, who, forced to admit him into the company of poets, receives the famous Irishman, and takes off his hat to him with a bow of surly recognition, scans him from head to foot; and passes over to the other side of the street. (471 - 472)

にもかかわらず、人物としては好まれなかったSwiftの生涯は悲劇的なものであったと言われていることを予測して、サッカレーは講話の始めにユーモリストであるSwiftを道化師にたとえている。

Harlequin without his mask is known to present a very sober countenance, and was himself, the story goes, the melancholy paitient whom the Doctor advised to go and see Harlequin— ... (469)

そしてこのSwift伝を語る講演の前段階では、一つの結論としてサッカレーは次のような問いかけを聴衆にしている。

. . . Would you have liked to be a friend of the great Dean? I should like to have been Shakespeare's shoeblack—just to have lived in his house, just to have worshipped him--to have run on his errands, and seen that sweet serene face. (473)

これに対して講演の初日からサッカレーの話を忠実に聴いていたCarlyleはSwiftの性格について人々と議論したあとで次のように述べた。

"I wish I could persuade Thackeray that the test of greatness in a man is not whether he (Thackeray) would like to meet him at a tea-party."

しかし、英雄、偉大を賛美するCarlyleとは違い、偉大であることに価値を認めないサッカレーは、平凡な日常生活を重んずる立場から言えば、これは当然の結果であろう。さらにSwiftの人物像にふれるにはサッカレーは彼の作品についても語らなくてはならなかった。これは最初の彼の約束とは違うかもしれない。しかし特に文学に関心の薄い一般人も多い聴衆を前にしては、伝記的事柄から話を始めることは講演者にとっては必要なことであったであろう。

Swiftの作家としての素晴らしさに触れないではいられなかったサッカレーは次のように語る。

Is it far to call the famous *Drapier's letters* patriotism? They are masterpieces of dreadful humour and invective: they are reasoned and fabulous as the lilliputian island. (491)

さらにSwiftの作品が持つユーモアの厳しさを取り上げつつ、Swiftの裏返しの人生観を*Gulliver's Travels*から彼は示す。

...it is truth topsy-turvy, entirely logical and absurd.

As for the humour and conduct of this famous fable, I suppose there is no person who reads but must admire; as for moral, I think it horrible, shameful, unmanly, blasphemous; and giant and great as this Dean is, I say we should hoot him. Some of this audience mayn't have read the last part of Gulliver, and to such I would recall the advice of the venerable Mr. Punch to persons about to marry, and say 'Don't'. (496)

ここで模範的なヴィクトリア朝人を装うサッカレーはSwiftの言葉をそのままに受けとりSwiftを断罪して見せる。しかし、Lilliput王国の情景記述について次のように語る。

What a surprising humour there is in these descriptions! How noble the satire is here! how just and honest! How perfect the image! (493)

ここは前述のモラルや厭生観を越えた、Swiftの人生の深い洞察力にもとずく真実描写力にたいする賛歌となっている。ユーモアとは、このような人間像にも目を逸さないで対決する力を持つものである。

そこにはHouyhnhnmsの国を去る時のGulliverの話があり、さらにサッカレーの感激と逆説に満ちた言葉が続けられる。彼の発言はユーモリストのコメントでもあるが、表面的で、見せかけである。一見道徳家らしく「このようなお話を読んではいけませんよ、と忠告の振りをする。」何故ならここにMr. Punchが登場するからである。

やがてSwiftの人間性についてサッカレーの同情的な語りが始まる。

A weary heart gets no gladness out of sunshine; a selfish man is sceptical about his friendship, as a man with no ear doesn't care for music. A frightful self-consciousness it must have been, which looked on mankind so darkly through those keen eyes of Swift. (496)

続いて再びVanessaとStellaの伝記的話に戻り、サッカレーは次のようなSwiftのための弁明を加える。

And yet to have had so much love, he must have given some. Treasures of wit and wisdom, and tenderness, too, must that man have have had locked up in the caverns of his gloomy heart, and shown fitfully to one or two whom he took in there. (505)

これは明らかにサッカレーの想像力になるSwiftの内面描写である。しかしSwiftの伝記と作品を出来るだけ広く、深く読み取る事のできた批評家にのみ許された描写ではなかろうか。そして最後の結びは次のように示される。

He broke from his fastest friend, Sheridan; he slunk away from his fondest admirer,

Pope. His laugh jars on one's ear after sevenscore years. He was always alone—alone and gnashing in the darkness, except when Stella's sweet smile came and shone upon him. When that went, silence and utter night closed over him. An immense genius: an awful downfall and ruin. So great a man he seems to me, that thinking of him is like thinking of an empire falling. We have other great names to mention—none, I think, however, so great or so gloomy. (505)

T. S. Eliot はサッカレーのこの一節を "one of the finest tributes that a man has ever given or received" と述べているほどである。[9] このT. S. Eliot の言葉こそ、サッカレーの描くSwift の全体像が的確なものであることを示す証ではなかろうか。

3

これまでのSwift の講演の読みを通してテーマであるユーモリストを考えてみよう。即ちユーモリストは誰か、サッカレーのユーモリストの定義はどうなのかなどである。

講演の題名通りSwift はユーモリストである。しかし同時にSwift はユーモリストが語る対象でもある。この場合、Swift はBarry Lyndon のように自己暴露を無意識になしているともいえよう。一方ではユーモリストのサッカレーが浮上してくる。

"To the best of his means and ability he comments on all the ordinary actions and passions of life almost." (470)

この一節はサッカレー自身の言葉であり、またSwift を指して言う言葉とも受けとられる。さらに次の一節を考えて見よう。

Accordingly, as he finds, and speaks, and feels the truth best, we regard him, esteem him—sometimes love him. And, as his business is to mark other people's lives and peculiarities, we moralize upon *his* life when he is gone—and yesterday's preacher becomes the text for to-day's sermon. (470)

上記の中で *"his"* はSwift を指していると考えられる。したがって "yesterday's preacher" はSwift であり、"today's sermon" をするのは、語り手サッカレーとなる。

サッカレーは「ユーモリストたち」の講演を各地を巡回しておこなったのち、アメリカで *Charity and Humour* (1853) の題名で再び講演を行っている。これはユーモリスト講演の補足的なものであり、かつ文字どおりの慈善講演であった。それはAngus Reach およびDouglas Jerrold の家族救済を目的とされていた。

したがってこれでは厳密なユーモリスト論の資料とはならないかもしれない。しかしこの慈善講演でも前回の講演を誤解されることを恐れてテーマの意味を説明していると思われる。

If the humorous writers claim to be weekday preachers, have they conferred any

benefit by their sermons? Are people happier, better, better disposed to their neighbours, more inclined to do works of kindness, to love, forbear, forgive, pity, after reading in Addison, in Steel, in Fielding, in Goldsmith, in Hood, in Dickens? I hope and believe so, and fancy that in writing they are also acting charitably, contributing with the means which Heaven supplies them to forward the end which brings you too together. (X, 615)

サッカレーの言うユーモリストとは "wit" に "love" を加えたもので、これは "tenderness" と "kindness" のある "humanity" にあふれた文人を指しているのである。

ユーモリストに愛や親切、思いやりなどの意味がはいったのはCarlyleやサッカレー以降と言われる。近代合理主義はすでにこの時代に始まっている。この中にあって、サッカレーのユーモリストには宗教的なものを残している。彼もまた "a week-day preacher" であるが、この点について

"I am not here, of course, to speak of any man's religious views, except in so far as they influence his literary character, his life, his humour" (489)

と述べている。

Swift以外のユーモリストについては次回とする。しかしサッカレーが最も扱い難くいにもかかわらず、取り上げたく思った作家はSwiftではなかろうか。サッカレーのフレーザー誌時代の作品、*Catherine* (1839), *Barry Lindon* (1844) などの風刺の厳しさにはSwiftに劣らないものがある。また*Punch*への寄稿、*The Book of Snobs* (1846−7) の作者としての彼には、Swiftと或る意味では同質のものがあったのではないであろうか。*The Book of Snobs* の作者として、自分を "one of them" と記していることは、この場合にも当てはまるのではなかろうか。このような視点から彼の講演を読み直すことは、彼の講演に対する正当な評価となるのではないかと思われる。

註

1 この講演の状況およびスウィフト論の一部分は拙著『サッカレーを読む』篠崎書林（1996）に記している。

2 Edger F. Harden, *Thackeray's English Humourists and Four Georges.* London and Tronto: U of Delaware P, 1985. 28.

3 Gordon N. Ray, *Thackeray: The Age of Wisdom*: 18477-1862. Oxford UP, 1958.
以下この書からの引用は（Wisdom, 頁数）と本文中に記す。

4 G. N. Ray ed. *Letters I-IV.*

5 Dudley Flamm, *Thackeray's Critics.* U of North Carolona P, 1966
以下この書からの引用は（Flamm, 項目番号）と本文中に記す。

6 George Saintsbury, *A Consideration of Thackeray.* New York: Rusell & Rusell, 1968. 202.
以下この書からの引用は（Saintsbury, 頁数）と本文中に記す。

7 Arthur Quiller-Couch, *Charles Dickens and Other Victorians.* Cambridge UP, 1925.

8 *The Oxford Thackeray with Illustrations,* XIII, ed. with an Introduction by George Saintsbury. Oxford UP. 1908. 以下このテキストからの引用は文末に頁数のみを記す。

9 H. N. Wethered, *On the Art of Thackeray.* Longmans, Green and Co., first edition 1938. Norwood Edition, 1978. 148.

10 E. F. Harden, 53-54.